

厚生労働科学省研究費補助金（がん臨床研究事業）
分担研究報告書

民間総合病院における外来化学療法チーム医療の整備と検証に関する研究

分担研究者 山内照夫・聖路加国際病院・腫瘍内科

研究要旨

民間総合病院における外来化学療法の問題点を明らかにし、がん患者のQOLと安全性改善のための方策を検討するために、外来化学療法センターにおける人員配置や利用状況などの現状調査を行った。患者数対医療者（看護師、薬剤師）数比が低く、人員の補充や人的資源活用の効率化の必要性がみられた。また、点滴注射治療に比べて経口抗がん剤・分子標的薬の服薬・副作用管理の整備が遅れており、対策検討が課題である。

A. 研究目的

聖路加国際病院は東京都地域がん診療連携拠点病院の指定を受けている。近接するがん診療専門施設（国立がん研究センター中央病院、癌研有明病院）とは異なり総合病院であることから、副作用の管理や合併症・併存症の管理において特徴的ながん診療が行われている。そのような環境下での民間総合病院としての現状の外来化学療法の問題点を明らかにし、がん患者のQOLと安全を更に改善するための方策をがん拠点病院として模索し、外来化学療法の新たなチーム医療モデルを作成することを本研究の目的とする。

B. 研究方法

外来点滴化学療法及び経口化学療法の問題点、解決策を外来化学療法担当医、外来看護師・点滴センター看護師・外来担当薬剤師などのチームで検討するために、一施設における現状把握を行った。がん診療（特に外来化学療法）に関与する診療科毎の人員数や配置、患者数の推移、内訳を調査した。

聖路加国際病院では外来化学療法（特に点滴注射による治療）はオンコロジーセンター（機能的に外来点滴治療センター）に集約されているため、センター内のスタッフを中心に調査を行った。また、オンコロジーセンター内に腫瘍内科外来が設置されており、外来化学療法実

施・管理に密接に関連するため、その診療状況も調査した。経口抗がん剤・分子標的薬については医師・外来看護師・薬剤師のチームによる患者指導体制を調査した。

（倫理面への配慮）

本研究は、疫学研究に関する倫理指針と臨床研究に関する倫理指針に従って行われた。

C. 研究結果

1. オンコロジーセンター医療スタッフ構成
医師 4 名（腫瘍内科医 3 名、精神腫瘍科医 1 名） 薬剤師 3 名（化学療法担当薬剤師 13 名のうち、3 名がローテーションで配属。13 名中 2 名ががん専門薬剤師。） 看護師 11 名（乳腺外科外来と兼務で総数 17 名のうち、配属数が 11 名） その中でがん看護専門看護師 1 名、がん化学療法看護認定看護師 1 名、乳がん看護認定看護師 1 名。

2. オンコロジーセンター利用状況

2012 年度年間外来化学療法件数は、15,235 件であった。2008 年度からの年次推移は増加傾向であった。（図 1）診療科としては、乳腺外科、腫瘍内科、消化器内科、消化器外科、呼吸器内科、女性総合診療部、血液腫瘍科、皮膚科、泌尿器科と多岐にわたっていた。2012 年度における診療科別各科の外来化学療法実施割合をみると約半数を乳腺外科が占めてい

た。(図2)

2004年度以降の化学療法件数の月次推移ではオンコロジーセンター開設の2009年度以降腫瘍内科の占める割合が着実に伸びていた。

(図3)また、腫瘍内科における診療の特異性から診療対象の重症度が高い患者が多く、緊急入院や外来処置が増えていた。(図4,5) それに対してオンコロジーセンター勤務の看護師数は不変であった。

3. 経口抗がん剤・分子標的薬の患者指導体制
経口抗がん剤や分子標的薬の服薬指導や副作用モニタリングは主に薬剤師が関わっているが、点滴製剤の調整が主な業務となっており、人員不足でまだ不十分であった。点滴注射薬との併用でない限り看護師の介入は少なかった。

D. 考察

点滴注射による抗がん剤投与については業務の流れは確立しており、安定している。問診票の導入により看護師の介入が確実に行われるようになっており、副作用など化学療法実施上の問題の医師へのフィードバックも行われている。しかし、副作用管理として医師、看護師、薬剤師、また、レジメン委員会を含めた病院としての包括的体制は整っていないのが現状である。

腫瘍内科の開設に合わせ、化学療法実施の場が外来へ移行し、数としての負担が現体制に負荷となってきている。また、診療内容も多岐にわたり、複雑になってきており、進行性がんを有する患者に対する治療や処置、入院対応、または、副作用管理上注意を要する点滴治療を限られた人員と場所で行っているのが実情である。

現体制とは異なる新たな形で患者のQOL改善や安全性確保を図る必要がある。マンパワーの補充と人的資源活用の効率化が課題と考えられた。人員補充は時間や予算の問題から中長期的課題であるが、まずは効率化が優先課題と考えられる。効率化によって創出された時間で患者教育や他職種とのコミュニケーションを図ることによって外来化学療法における質の向上が得られると考えられた。

E. 結論

オンコロジーセンター(外来点滴治療センター)における人員配置、利用状況について調査を行った。外来点滴治療件数は増加傾向にある中で安全性確保に対する人員確保(看護師、薬剤師)と配置は必須である。次年度課題として効率化を優先し、対策を検討する必要がある。経口抗がん剤・分子標的薬管理の体制を整える必要がある。

F. 健康危機情報

該当なし

G. 研究発表

1. 論文発表
なし
2. 学会発表
なし

H. 知的所有権の出願・取得状況(予定を含む)

1. 特許取得
なし
2. 実用新案登録
なし
3. その他

図 表

図 1 年次外来化学療法件数



図 2 2012 年度診療科別化学療法件数割合

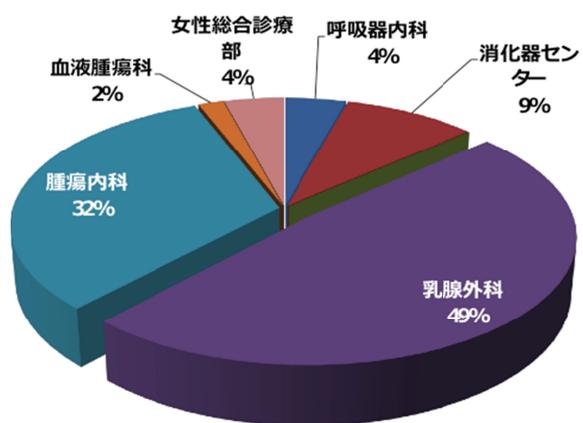


図3 月次診療科別化学療法件数

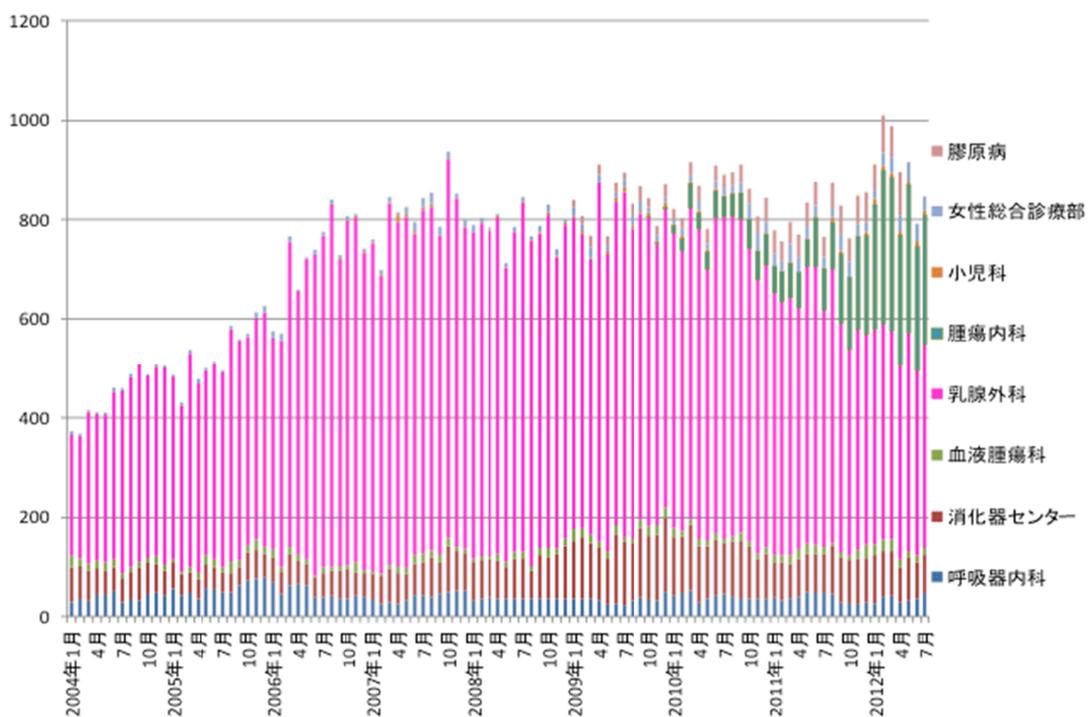


図4 腫瘍内科緊急入院件数

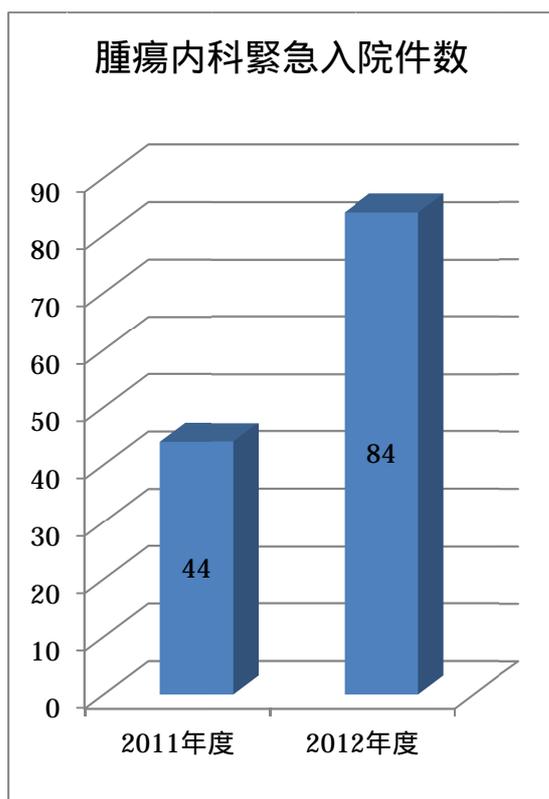


図5 オンコロジーセンター外来処置件数

